

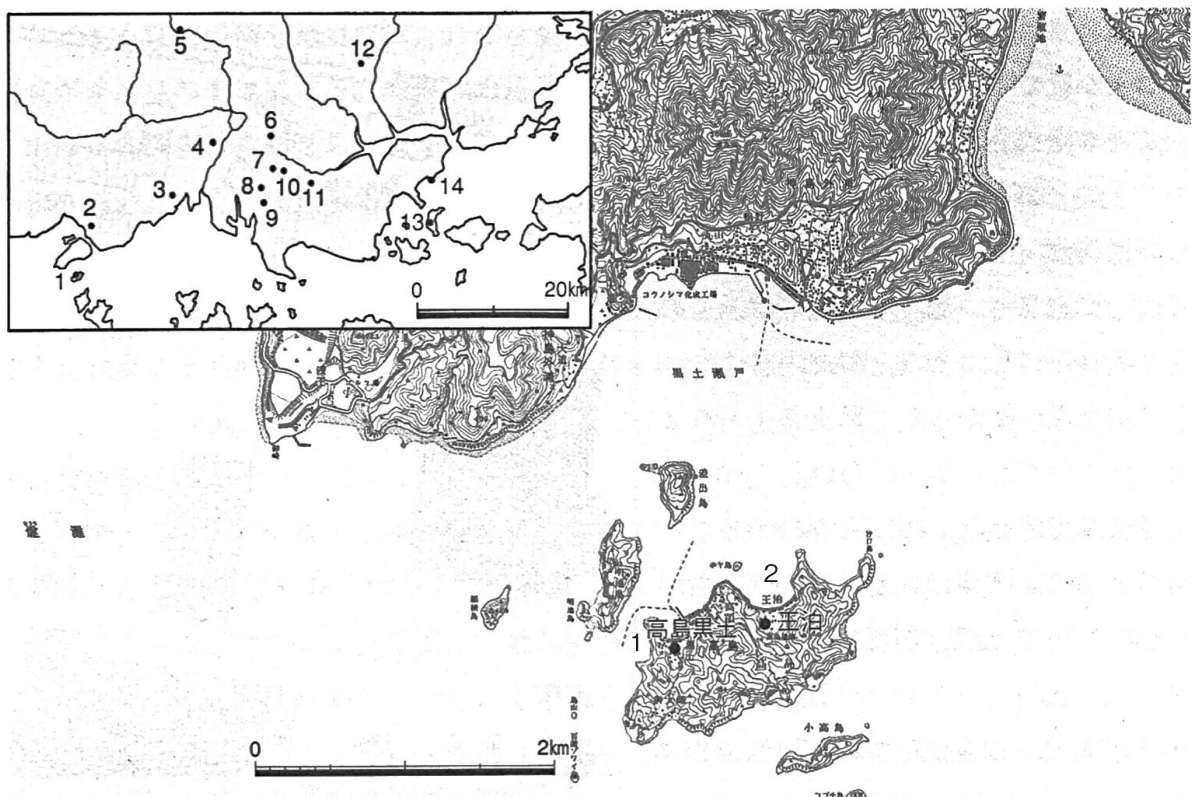
岡山県高島黒土遺跡発掘と神武東征神話

矢野 健 一

1 岡山県高島黒土遺跡発掘の目的とその背景

山内清男は1943年（昭和18年）4月9～23日に岡山県笠岡市の瀬戸内海に浮かぶ高島^{注(1)}で発掘調査を実施し（矢野編著2004）、縄文晩期の「黒土B1式」「黒土B2式」を自ら設定した。この発掘は、当時、愛媛県史跡調査員だった郷土史家の鵜久森徑峯に依頼されたもので、黒土遺跡だけではなく、同島の王泊遺跡の調査も山内に依頼し、山内は同時に実施しているが、山内が黒土に労力を集中したため、鵜久森は王泊を自ら発掘調査している（図1）。

この発掘の経緯は、当時、文部省が実施した神武東征神話に登場する各地の所在地の指定と関係している。文部省は1938（昭和13）年に「紀元2600年奉祝会」の委嘱を受け、「神武天皇聖蹟調査」を開始し、1940（昭和15）年5月3日付で「高千穂宮」以下36ヶ所の「聖蹟」と18ヶ所の「関係遺蹟」を指定した。この時、神武天皇が東征の過程で滞在した「高嶋宮伝説地」の所在地が「岡山県児島郡甲浦村大字宮ノ浦字高島」（現岡山市南区宮浦）に決定したが、調査の結果、指定されなかった候補地7ヶ所が列挙され（表1）、その筆頭に「岡山県小田郡神島外村」（現笠岡市高島、表1の②）



1 高島黒土遺跡 2 津雲貝塚 3 中津貝塚 4 里木貝塚 5 ケンギョウ田遺跡 6 羽島貝塚 7 船元貝塚
8 福田貝塚 9 広江遺跡 10 磯の森貝塚 11 彦崎貝塚 12 津島遺跡 13 大浦遺跡 14 波張崎遺跡

図1 岡山県笠岡市高島の黒土遺跡(1)と王泊遺跡(2) * (矢野2004)より引用

表1 『神武天皇聖蹟調査報告』（文部省 1942）における高島宮候補地一覧

| 番号 | 旧地名 | 現地名 | 備考 |
|----|-------------------------|-------------|----------------------------|
| ① | 岡山県児島郡甲浦村 (大字宮ノ浦字高島) | 岡山市南区宮浦高島 | 神武天皇聖蹟指定地決定 |
| ② | 岡山県小田郡神島外村 (大字高島) | 笠岡市高島 | 文献上の証拠が不十分で、地理的に不適當。 |
| ③ | 広島県沼隈郡田尻村・水呑村 | 福山市田尻町・水呑町 | 地名に「高島」がなく、文献上の根拠も不十分。 |
| ④ | 広島県沼隈郡田島村 | 福山市内海町田島 | 皇森神社が高島宮と関係する証拠に乏しい。 |
| ⑤ | 岡山県上道郡高島村 | 岡山市中区高島地区 | 龍口山付近が高島宮と関係する証拠に乏しい。 |
| ⑥ | 岡山県児島郡本荘村 (大字鹽生字高島) | 倉敷市児島地域本荘地区 | この地の高島神社に関する文献上の根拠が乏しい。 |
| ⑦ | 広島県沼隈郡柳津村 | 福山市柳津町 | 龍王山が高島宮と関係する証拠に乏しく、地形も不適當。 |
| ⑧ | 広島県沼隈郡高須村 | 尾道市高須町 | 大元山が高島宮と関係する根拠がない。 |

の高島があげられた。1944（昭和19）年11月7日、この高島は、文部省より、史跡名勝天然記念物法の「名勝」に指定される。これに先立ち、鶴久森は神武東征との関連を明らかにするために、山内清男に発掘調査を依頼し、山内は1943（昭和18）年4月に高島の黒土・王泊両遺跡の発掘調査を実施した。鶴久森は、さらに、京都帝国大学に依頼し、同年11月、小林行雄・角田文衛・坪井清足が王泊遺跡を発掘し、翌1944（昭和19）年5月、梅原末治・小林・角田らが高島黒土遺跡を調査した。この笠岡市の高島が高島宮であるという説は、鉄道省が作成した1939（昭和14）年発行の『肇國の聖蹟』（祖国認識旅行叢書第9集）でも、神武東征高島宮の筆頭候補として、紹介している。

ようするに、この遺跡の発掘調査は神武東征神話に登場する各地の史跡指定を目指す資料収集によるものであるが、大和朝廷の時代と関係する古墳や土師器・須恵器・青銅器・鉄器・勾玉等だけではなく、貝塚・石器・弥生土器・縄文土器・人骨など、縄文・弥生時代の考古学的証拠も、神武東征神話と深く関係するとみなされており、鶴久森もそのように考えていた。実際、鶴久森が自ら作成した『高嶋聖蹟寫真帖』（鶴久森1943）には、高島で発掘された土師器以外に縄文石器・骨角器・縄文土器・弥生土器が多数掲載されている（図3）。弥生土器だけではなく、縄文土器も、神武東征神話を証明するために積極的に活用されており、旧石器時代の遺物が発見されていたとすれば、同じように積極的に活用されたはずである。

神武東征神話の聖蹟指定に関して、高島宮の所在地は、特に、岡山・広島両県に多くの候補地が存在しており、聖蹟指定前後には、各候補地が、自らの土地の有利性を主張するため、多くの書籍・論考が刊行された。これらの多くは、笠岡市の高島と同様、縄文・弥生時代を含む遺跡・貝塚・古墳を列挙し、神武東征との関係を主張している。戦後間もない登呂遺跡や岩宿遺跡の発掘が戦前の神話による歴史を変えたというようなイメージを抱くことが多いが、昭和初期には、すでに、縄文時代が「日本人」の歴史の一部として一般に認識されることも珍しくなかった。その一端を紹介したい。

2 高島宮の所在地と考古学的根拠

文部省による神武東征関連史跡調査決定にあたっては、文部省職員と調査委員による実地調査がそれぞれ実施されている。文部省職員の実地調査は各地原則1回で、高島宮については、上田三平嘱託ほか3名が広島・岡山両県で実施している。高千穂宮は、黒板昌矢史跡考査官ほか3名が宮崎・鹿児島両県で実施している。調査委員の実地調査も、各地原則1回だが、高千穂宮は鹿児島・宮崎両県とも4回実施されており、決定が困難で1ヶ所に決められていない。高島宮に関しては候補地が多いこともあるが、少なくとも5回実施されており、異例とってよい。

候補地が多いことも影響して、高島宮の所在地を主張する書籍が数多く刊行されている。すべてを渉猟したわけではないが、多くは1937(昭和12)～1942(昭和17)年で、聖跡の指定を受けるために、各町村が企画・援助して出版したものが多く、筆者が興味を持ったのは、各書は古墳だけではなく、貝塚や通常の遺跡・遺物を積極的に紹介している点である。笠岡市の高島は聖跡指定に至らなかったが、その理由として考古学的証拠が不足していたと考え、その点を充実させて、名勝指定を受けるために、実際に神武天皇が3年間以上滞在した高島宮であることを証明したいと、鶴久森は考えたのではないか。

では、当時、神武天皇の高島宮所在地であることと、貝塚・遺跡や縄文・弥生土器の存在はどのように関係すると考えられていたか、各書の記載を紹介したい。ただし、神武天皇聖跡指定における文部省の選定理由には、考古学的根拠は一切記載されていない。高島宮に落選した候補地の筆頭に笠岡市の高島は掲載されているが、それ以外の落選候補地も含めて、基本的には根拠となる文献上の記載に矛盾しないことと、宮にふさわしい地理的地形的特徴を備えているかどうか、の2点が判断材料であったと推定できる。

以下、出版年代の古い順に、高島宮所在地に関する書籍を紹介し、記載されている考古学的根拠を述べる。各文献で言及している所在地各説は、表1を参照していただきたい。表1のリストに付した番号を各説に付記している。

A 水藤千代造編 1937『高島村史』吉備高島聖蹟顕彰会

岡山県上道郡高島村(現岡山市中区高島地区)説(⑤)

神武天皇聖跡指定申請のため、この顕彰会を発足し、村史を刊行したことを村長が「序」で明記している。石器時代、古墳の記載が充実している。出雲との交通を重要視して、上道郡高島村説を主張している。「第2編 各論 第1節古跡 第2章古墳」に石鏃などの石器を記載し、岡山県では弥生土器が多いことを指摘しつつ、備中大島村(現笠岡市)の津雲貝塚よりも多くの縄文土器が出土することを指摘している。これは、津雲貝塚に近い笠岡市の高島を有力候補として意識したためだろう。縄文土器の多寡が神武天皇の宮であることの証拠となる理由について言及していないが、有利な証拠として認識していたことは確実である。弥生土器については、「銅器時代」「金石併用時代」であることを指摘し、弥生土器の時代が「神武天皇ご創業」の時代であると述べる。「石器時代」の墳墓として、箱式石棺、合口甕棺などを記載している。古墳については、高島村内の茶臼山カラウト古墳を記載し、高島村付近の古墳を大和と比較し、高島村に備前国府が設置されたことを強調している。

B 勝井純 1939『神武天皇御東遷聖蹟考』巧人社（1937年発行、1939年改訂）

田尻村田島説（③）、神島村高島説（②）、甲浦村宮浦説（①）、上道郡高島説（⑤）の順に列挙する。いずれも、文献資料のみで、特に福山志料に依拠。神武天皇東征に関する遺跡や土地を旅行ガイドブックのように一般に紹介するのが主で、学説の検討が目的ではない。

C 兼田高洲 1938『吉備高島宮研究志料』吉備高須史蹟顕彰会

広島県沼隈郡田島村（現福山市内海町田島）説（④）

「沼隈郡田島村」（現福山市田島）の「田島」は本来、「高島」であり、村内の王太子神社の社伝では、神武天皇をまつる村内の王太子神社が高島宮の跡であるが、神武天皇即位以前の行宮と伝える、と述べる。1935（昭和10）年には、皇紀2600年を記念して、境内に「吉備高島宮址」の碑が建てられたことや、神社のある「内浦」という地名は「内裏」を指すと王太子神社縁起などで伝えられていることを述べる。

内浦には、貝殻や古人骨のような骨が出土し、貝塚だろうと推測する。ただし、骨とともに錆びた剣や鏡の破片、須恵器のようなものが出土したとも述べる。喜田貞吉が1919（大正8）年、来訪し、弥生土器や土師器のようなものを人骨とともに確認したことを記している。おそらく、小古墳が破壊されていたのだろう。古墳の数は「沼隈郡」（現在の尾道市・福山市の一部）が73基、隣接する「深安郡」（現在の福山市・笠岡市の一部）が73基、「芦名郡」（福山市・府中市・神石高原町の一部）が108基に上ることを示す。

**D 高田守一編 1939『神武天皇御聖蹟 吉備高島宮址と高須』広島県沼隈郡高須村 吉備高島宮址顕彰会
広島県沼隈郡高須村（現尾道市）説（⑧）**

編者高田は高須村村長。(1) 地名、(2) 神社、(3) 兵食、(4) 武器、(5) 出雲族、(6) 地形、(7) 古墳及び貝塚、(8) 其の地（「他」の誤字か？）の史跡、の8章からなる。図版に「高須大田出土石器」「人骨及び土器片」「縄紋式土器紋様」「底部土器片」「大田貝塚出土横臥屈葬人骨」の写真が掲載されている（図2）。大田部落が「兵站地」であり、大田貝塚の「矢尻」は「武器製造には秀でたる技術を持ちたるものと思はる」と記しているので、縄文土器の使用者が神武天皇の軍に従軍した可能性を考えていたようである。「(七) 古墳及び貝塚」で大田貝塚を第一に紹介し、地域の古墳を列挙する^{注(2)}。

E 中村黙郎編 1939『吉備高島宮址考』本荘村神武天皇聖蹟顕彰会

岡山県児島郡本荘村（現倉敷市本荘地区）説（⑥）

著者は児島郡本荘小学校教員（訓導）の片山巍。本荘村の高島付近に古墳が多数あることや、神武天皇をまつる神社があることなどを根拠に、高島宮であることを主張している。

F 濱本鶴賓編著 1939（3月23日）『聖蹟吉備高島の再検討』吉備高島顕彰会

広島県沼隈郡田尻村・水呑村（現福山市田尻町・水呑町ほか）説（③）

第1章第8節「考古学上より見たる穴海址」で、沼隈郡高島他の候補地ごとに、「貝塚・包蔵地・窯跡・散布（地）・単独・その他」の項目を設け、各項目の数の多寡で比較し、田尻村・水呑村が



図2 神武天皇聖蹟の証拠として掲載された広島県大田貝塚出土遺物
* (高田 1939) より引用

所在する備後は、現状でも備前・備中に遜色ないと述べる。しかも、考古学研究が備前・備中に比べて遅れているので、今後、遺跡数がさらに増える可能性が高いと述べる。

「第4章 結論、聖蹟は備後沿岸にあらん」で、備後の史跡を述べる中で、「古墳」を紹介した後、「貝塚」の項目で「水呑村に2ヶ所」あることを述べ（洗谷貝塚と浜貝塚か?）、「地域」の面積が広く、石斧と縄文土器などが出土することを述べ、田尻村から石斧・土錘の他に、弥生土器中に鉄鏃が数点はいった状態のものが発見されたことを述べる。

村上正名著「考古学上より見たる吉備高島旧址」を掲載し、大田貝塚に関する清野謙次、島田貞彦、吉野益見の文献をあげている。また、吉備地域の貝塚や遺跡の分布が、松永湾、福山湾、水島灘、児島湾の4地域に及び、441ヶ所の多数に及ぶことを指摘する。縄文土器が主体で、弥生土器に移り変わることを述べ、文様が多様であること、石器も種類が豊富で、サヌカイト、黒曜石など近隣では得られない石材を含むことを強調する。石材から、四国や山陰との交通が盛んであったと結論づける。土偶・土版も数種類あり、神武東征の時期に近づくにつれ、種類や数が増えると述べる。これらの遺跡所在地を、大きく(1)松永湾・福山湾沿岸、(2)児島湾・水島灘沿岸、の2地域に区分し、前者に157ヶ所、後者に223ヶ所の遺跡が存在すると述べる。両者とも、当時は湾が入り組んで、良港が多数、存在したはずだと述べる。

石器時代遺跡は、佐藤美津夫編「岡山県石器時代地名表」(『考古学』8-10)と村上正名編「備後

東南部石器時代地名表」に依拠している。備後は他にも多くの遺跡があるはずなので、備前・備中との比較は無意味だと述べる。原史時代（古墳時代）にはさらに遺跡数が増え、備後地方には336の古墳があり、石器（縄文）時代・金石併用（弥生）時代・原史（古墳）時代を通じて、この地域の住民が新しい文化を「自己の文化の内に包含」していったことを物語る、と述べる。

つまり、この地の縄文時代の住民が神武天皇東遷により、九州の文化を摂取したはずで、九州だけではなく、大陸伝来の文化や出雲との交通による山陰文化、大和との交通による中央文化を吸収したと述べる。

G 菅原守・吉原晴景 1939『高島宮史蹟』柳津村吉備高島顕彰会

広島県沼隈郡柳津村（現福山市柳津町）説 ⑦

歴史の理解には古墳や貝塚など考古学的研究が必要であると述べる。縄文時代の貝塚群は「蝦夷族」「海部族」「隼人族」も含む集団によって形成されたと述べる。「蝦夷族」は「天孫族」に退治されたが、先住土着人の女を素戔嗚尊は娶るので、先住「蝦夷族」も一部は「天孫族」に同化したはずだと述べる。弥生土器を用いたのは「天孫族」と「出雲族」であり、弥生土器に代わるのは出雲から来た素戔嗚尊が当地を征服したためで、その後、東征した神武天皇にその地を譲ったのが高島宮であると述べる。また、この地方の民族は「天孫族」と混血した「蝦夷族」の血を継承する「海人部族」であり、神武天皇は「出雲族」と連携し、「海人部族」や「隼人族」を東征に同行させた。「出雲族」と「天孫族」はこの順に地上に出現したと考えており、「出雲族」を国津神に対応させている。神話の証明に貝塚や古墳を用いており、「石器時代・土器時代（縄文式・弥生式）・青銅器時代・鉄器時代」という時代区分を使用している。

「第5章 松永湾沿岸の貝塚群」「第6章 御蔭山を廻る古墳群」で、全230頁の28%（第5章だけで22%）を使用し、馬取貝塚・下迫貝塚の詳細な発掘調査報告を掲載している。大田貝塚は文章のみだが、詳細な報告を掲載している。神社、地名や由緒、伝説は新しく作られたり、変化するが、貝塚、古墳などの遺跡の造作は困難であるとし、その重要性を力説する。縄文土器と弥生土器が同一遺跡から出土することを重視し、原住民が新しい文化を「摂取消化」したと解釈する。貝塚・古墳を前面に出して主張するのは、神社や地名では不利であると感じたためかもしれない。

H 水原岩太郎編著 1940『参修高島考』水原岩太郎

岡山県児島郡甲浦村大字宮ノ浦字高島（現岡山市南区宮浦高島）説 ①

著者は吉備考古学会を主催し、1929（昭和4）年～1943（昭和18）年に、雑誌『吉備考古』を刊行した。本書は、考古学的知見だけではなく、文献や地勢など、幅広い観点から、聖跡指定された甲浦村説 ①が正しいことを詳細に論じている。特に、「甲浦村高島」の配石遺構（「神籬」または「天津磐境」と呼称）を弥生土器使用者と関連づけて論じている。著者は弥生土器使用者を「海洋民族」と考え、神武東征に重要な役割を果たしたと考えている。他の候補地の多くが古墳の存在を神武東征と関連させるのに対し、神武東征の年代を古墳時代初期ないし弥生時代に否定し、考古学の年代観を適用している点が注目できる。

ただし、縄文土器使用者は弥生土器使用者と共存することもあり、両者が混合していたことを弥生土器の文様などから主張する。また、弥生時代以降、古墳時代の埴輪にも縄文以来の文様が継承

されていると考えており、縄文時代の集団の少なくとも一部は弥生時代・古墳時代に血統を残したと考えている。

I 信濃教育会編 1940『神武天皇聖蹟攷』信濃毎日新聞社出版部

岡山県児島郡甲浦村（現岡山市南区宮浦高島）説 ①

文部省による神武天皇聖蹟指定決定後の刊行。「岡山県小田郡神島外村」（現笠岡市高島）説 ②よりも文部省決定の甲浦説を妥当とみているが、甲浦村の高島に限定されるのではなく、宮都はもっと広大であったと考えている。

J 澤田延音 1941『純正 神武天皇聖蹟史』

文部省による聖蹟指定決定後の刊行。岡山県児島郡甲浦村大字宮ノ浦字高島説 ①を紹介するのみ。

K 永山卯三郎 1943『吉備国高島宮』吉田徳太郎

表1の①・②・⑤・⑥・⑧ほか4ヶ所を候補地とし、これらすべてに、可能性があると論じる。地理学、考古学、史学、いずれの見地からも甲乙決めがたいと結論づける。考古学的見地からは、「縄文式文化、又神武天皇時代と推定せらるる青銅器、弥生式文化乃至土師器須恵器時代」を通じて、各候補地とも「大同小異」と述べる。結論として、個々の伝説地以外の場所に、新たに「吉備高島神宮」を建立することを呼びかけている。

L 鷗久森徑峯 1943『高嶋聖蹟写真帖』大高嶋聖蹟保存会

岡山県小田郡神島外村（現笠岡市高島）説 ②

神武東征聖蹟指定には落選したが、史跡名勝天然記念物における名勝に指定されたことを記念して出版された「序文」に記されているが、1943（昭和18）年12月28日発行なので、名勝指定日の1944（昭和19）年11月7日より、約1年早く刊行されている。おそらく、内定の通知を得た時に出版したのだろう。京大調査で出土した縄文土器・土師器・石器・骨角器などが多くの写真で紹介されている（図3）。

以上、筆者が調査した12件の文献のうち、8件は縄文遺跡や弥生遺跡を含む考古学的記載や写真・図が充実していた。しかも、縄文遺跡に言及しているものはすべて、その使用者が神武天皇東征と関係、もしくは東征軍に参加していると考えている。大正期における清野謙次の人骨研究の成果により、原日本人説が普及しており、上記の見解はその影響も受けているはずであるとはいえ、縄文人が神武東征軍に参加することを主張する見解がこれほど一般化しているのは予想外であった。

つまり、神武天皇東征神話の舞台が各候補地であることを証明する際に、縄文土器が蝦夷の製作物であることを主張しつつ、その存在を神武天皇滞在の証明として利用することが有利な条件になるとみなされている。また、神武東征軍が「国津神」（「出雲族」などが比定される）と、縄文土器使用者との混血を含むことも当然のように想定されている。もし、戦前、旧石器時代の遺物が発見・確



図3 神武天皇聖蹟の証拠として掲載された岡山神島外村（高島）出土遺物
*（鶴久森 1943）より引用

定していれば、その存在も神武天皇滞在の証拠として、有効に機能したはずである。神武天皇が滞
在する場所は無人の地ではなく、そこに先住民が居住していなければ、「征服」する意味がない。
高島宮に神武天皇が3年間以上、長期間滞在したからには、そこに多くの先住民が住んでいたはず
である、と考えるのは自然なことである。

3 考古学研究と神話

縄文土器使用者が現代日本人の祖先であるという認識は、大正期に清野謙次が人骨の形質学的研
究から主張したもので、原日本人説と呼ばれる（清野 1933）。これについては、長谷部言人も同意見
で、昭和初期には定説化が進んでいく。弥生土器が弥生時代という1つの時代をなすという認識も
大正期に定説化していく新しい認識であり、鳥居竜蔵は弥生土器使用者を「固有日本人」という日
本列島に渡来した新たな集団と認識し、縄文土器使用者は弥生土器使用者に圧迫されて、東に追い
やられていくという構図を想定していた。すなわち、弥生土器の普及が1つの時代を形成するこ
とが明らかになっても、縄文土器使用者を蝦夷と想定する見解は大正時代以降も色濃く残っていた。

大正から昭和初期は、考古学の方法論の確立期であり、古代史学者の喜田貞吉と考古学者の山
内清男との間のミネルヴァ論争も、その頃の著名な論争である（勅使河原 1994）。山内清男は、1930
（昭和5）年に亀ヶ岡式土器の編年を根拠に縄文時代終末の年代が全国いずれの地でも大差ないこ
とを主張する。これに対して、喜田貞吉は1934（昭和9）年に石器時代遺跡から宋銭などが共伴した

ことを報告する。山内は1937(昭和12)年に全国の縄文土器の編年表を公表し、北海道から九州まで、縄文土器の終末が同時であることを主張する。これに対して、1936(昭和11)年に喜田は反論し、さらに相互の応酬が続いたが、結局、両者とも見解を変えることはなかった。現在では、理論的には山内の主張が正しかったことが認められている。

山内の主張には当初は考古学者からの反対意見が多かった。喜田は縄文土器を使用した集団が平安時代、あるいはそれ以降も残存した可能性を考えていた。東北地方や山間部などで、縄文人の末裔が生き延びたと考えていた。山内は逆に、弥生文化が最初に出現したと考えられていた西日本も遅れて出現したと考えられていた東日本と同時に縄文時代から弥生時代に移行すると主張した。喜田は山内の考えは常識に反すると主張した。ただし、ミネルヴァ論争において重要な点は、喜田も山内も縄文土器使用者の系統が日本人の中に含まれることを強調する点で、同じ立場にあることである。

しかしながら、喜田説は、縄文土器使用者の一部が、弥生土器使用者と混交せずに、孤立的に生存していくという説であるから、鳥居説に近い、と位置づけることも可能である。しかも、両者の併存期間を西日本においても著しく遅くまで想定した点、当時の常識に逆行するように思えるが、後藤守一らの考古学者が喜田説に理解を示している点、違和感を覚える。これについては、全国一律に縄文時代が弥生時代に変化する、という山内の説明が理論的すぎて、遺跡発掘の現状と隔たりがあるように感じられ、反発を受けたのではないかと考える。

ここで紹介した高島宮関連文献では、縄文土器使用者は蝦夷系と考えられており、昭和初期には、山内より鳥居や喜田に近い見解が郷土史家や歴史愛好者に普及していたようである。当時は、縄文土器使用者と弥生土器使用者は、集団の違いであると一般には認識されていたと考えて良い。しかしながら、縄文土器使用者も神武東征の協力者であったり、女性の縄文土器使用者が東征軍に仕えたりしたことが想定されており、縄文土器使用者がその後の日本の歴史に血筋を残す存在であったという考えが常識化していたのは確実である。

高島宮に関する縄文土器使用者と弥生土器使用者との関係に関して、郷土史家の多くは、両者の遺跡における共伴関係を前提として解釈しており、基本的に喜田的立場である。土器の編年研究が不十分な状態では、層位学的所見のみから共伴の妥当性を確実に判断するのは困難なので、当時の研究状況を勘案すれば、縄文土器と弥生土器の共伴を前提とした議論は常識的な議論と考えるべきだろう。

1942(昭和17)年に刊行された直良信夫の『古代日本人の生活』(科学文化選書)は、子供向けの図書であるが、弥生文化は東漸するにつれて、「相手を同化したり」「逆に同化されたりして」東へ伝播したことを述べている。縄文土器使用者は、神武天皇が即位した紀元2600年以前に住んでいた先住民族である「国津神」や「その祖先方」であり、今の日本人の「遠い祖先」であることに間違いはない、と述べている。つまり、昭和初期には縄文人が日本人の祖先の一部を構成する重要な集団であるとみる見解が一般向けに主張されており、現代の縄文時代観と基本的には変わらない。神話に関する認識のみが、現代の歴史観との根本的な相違点であると考えるとよい。

このような状況を鑑みると、戦前と戦後の考古学的成果の理解は、神武紀元など、日本書紀・古事記の記載を史実として受け入れるか、受け入れないかの違いに過ぎないのではないかという感想も抱かざるを得ない。考古学的成果は神武紀元と結びつけて解釈することも容易で、実際にそのよ

うな解釈が普及した。戦後、それを否定した解釈もすみやかに普及した。

考古学の議論では、大正～昭和初期に原日本人説が定説化し、昭和初期のミネルヴァ論争が山内の勝利に終わったという学史的な理解が可能だが、このことは、神武天皇東征神話や神武天皇の存在を否定することとは、直接的には全く無関係である。山内も参加した戦前の高島黒土遺跡の発掘は神武東征神話の証明のために実施され、名勝指定に成功したという点では、その目的を達したのである。考古学的研究が神話の証明に有効に機能した一例である。戦前の古代史研究における考古学の意義については、これ以外に、様々な事例を検討していきたい。高島宮についても未読の文献も多く、検討を重ねたい。

注

- (1) この京大調査の報告は1956年に刊行されている(坪井1956)。
- (2) 「大田」の表記は、「大田」「太田」の2種が混在している。現在は「大田」貝塚と表記するのが正式な遺跡の名称なので、本論では「大田」に統一している。

参考文献

- 鶴久森徑峯 1943『高嶋聖蹟寫真帖』大高嶋聖蹟保存会
 大場磐雄 1931「関東に於ける奥羽薄手式土器(上)」『史前学雑誌』3-5
 大場磐雄 1932「関東に於ける奥羽薄手式土器(下)」『史前学雑誌』4-1
 兼田高洲 1938『吉備高島宮研究志料』吉備高島史蹟顕彰会
 勝井純 1939『神武天皇御東遷聖蹟考』巧人社(1937年発行、1939年改訂)
 清野謙次 1933『増補 日本原人の研究』萩原星文堂
 後藤守一 1927『日本考古学』四海書房
 工藤雅樹 1987「四 日本人種・民族論」『論争・学説日本考古学1 総論』雄山閣
 澤田延音 1941『純正 神武天皇聖蹟史』澤田延音
 信濃教育会編 1940『神武天皇聖蹟攷』信濃毎日新聞社出版部
 島田貞彦 1930「備後国沼隈郡高須村太田貝塚について」『歴史と地理』26-4
 菅原守・吉原晴景 1939『高島宮史蹟』柳津村吉備高島顕彰会
 高田守一編 1939『神武天皇御東遷 吉備高島宮址と高須』広島県沼隈郡高須村・吉備高島宮址顕彰会
 坪井清足 1956『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』岡山県高島遺跡調査委員会
 鉄道省編著 1939『肇國の聖蹟』(祖国認識旅行叢書 第9輯)博文館
 鳥居竜蔵 1925『有史以前の日本』磯部甲陽堂
 直良信夫 1942『古代日本人の生活』(科学文化選書)文祥堂
 中村黙郎編 1939『吉備高島宮址考』本莊村神武天皇聖蹟顕彰会
 永江維章 1940『輝く肇國』大日本國本会
 永山卯三郎 1943『吉備國高島宮』吉田書店
 濱本鶴賓編著 1939『聖蹟吉備高島の再検討』吉備高島顕彰会
 広島県 1941『神武天皇聖蹟誌』広島県
 水原岩太郎編著 1940『参修高島考』水原岩太郎
 水藤千代造編 1937『高島村史』吉備高島聖蹟顕彰会
 文部省 1942『神武天皇聖蹟調査報告』文部省
 矢野健一編著 2004「岡山県高島黒土遺跡資料」『山内清男考古資料 14』(奈良文化財研究所史料 66)奈良文化財研究所
 森本六爾 1933「東日本の縄文式時代における弥生式並びに祝部式系文化要素の摘出の問題」『考古学』4-1
 勅使河原彰 1994「ミネルヴァ論争」『市民の考古学1 論争と考古学』名著出版
 勅使河原彰 1995『日本考古学の歩み』名著出版

(本学文学部特別任用教授)

The Excavations of Takashima-kurotsuchi Site in Okayama Prefecture and the Mith of the Eastern Expedition of Emperor Jimmu

by

Kenichi Yano

YAMANOUCHI Sugao carried out the excavation of Kurotsuchi Site and Odomari Site in Takashima in Koushimasoto-son, Oda-gun, Okayama Prefecture (the present Kasaoka City) in 1943 (Showa 18), and set Kurotsuchil B1/B2 type pottery. This excavation was asked for in UKUMORI Keihou who was a member of Ehime Investigation Committee for Historic Remains to prove that it was Takashima of Kasaoka City where the Kibi Takashima Palace appeared in the myth of Emperor Jimmu's Eastern Expedition. Ukumori also asked the Kyoto Empire University for the excavation of both sites just after the Yamanouchi excavation, and KOBAYASHI Yukio and others carried out the excavation. The Ministry of Education pushed forward a project to appoint historic spots which appeared in the Myth of Emperor Jimmu's Eastern Expedition as holy sites to honor early in the Showa era. About the Kibi Takashima Palace which appeared in the myth, many proposed sites competed for the legitimacy visiting the location, and not only old burial mounds (Kofun) but also the existence of shell mounds and Jomon pottery was focused on as the important evidence. In other words, early in the Showa era, it is indicated that it was recognized that the Jomon culture is an important component of the Japanese culture during the history based on the myth.